

下商物語

本校の危機のはなし

教諭 林 俊行

創立百二十八周年を迎えた本校は、わが国を代表する商業高校としての輝く歴史と伝統があります。本校の辿った道程は決して平坦ではありませんでした。今回は創立期から現在までの学校の存続(単独商業高校としての存続も含め)が危うかった時のことを過去の記録を参考に紹介して読んでみたいと思います。

まず、最初の存続の危機は、意外な事に創立期にすでに始まっていました。当時の赤間閣全体が海陸交通機関に暴革を起し空前の落潮時代が到来し、早くも県立に移管との声が高まりました。次いで、開校して六年後には、次の危機が訪れます。それは、学校の経費が贅沢(制服が華美・授業料が高額等)で、当時の経済界の不況の中で地方財政が悪化して学校経営に困難をきたしたことで、生徒数が激減した時代が到来するのです。この時期は大変な時代で、本校の校長先生の在任期間からみても非常事態であったことが伺えます。例えば、第四代校長の内田一心氏が下関市長と兼務といったことからみても、今では考えられな

い事態であったことが伺えます。事実、第四代から第六代の校長先生の在任期間は、いずれも数ヶ月期間であり、第六代堤校長先生の記録写真は現存していないのです。激動の明治期の苦境を歴代名物校長先生の一人第八代齋藤軍八郎先生が就任(在任十九年七月は歴代最長)され、本校の名声大正時代にかけ一気に高まることになりました。ところが、大正十一年三月十四日の午後九時ごろ当時の池田山校舎が原因不明の火災に遭い、一部の校舎を残して殆ど燃えてしまったのです。非常に惜しいことに、初代万古館所蔵の七千八百冊もの貴重な蔵書と扁額もすべて失ってしまいました。その後仮設校舎で授業再開となりましたが、このことがきっかけで現在の千量ヶ原へと移転することになったのです。

四度目の校舎が大正末期に完成して、現在の千量ヶ原校舎へと至り、激動の昭和期に入り、太平洋戦争に突入し、国策として当時の商業学校は、工業が農業の学校へ転換するような非常措置がとられたのです。当時全国で四百五十校あつた商業学校は、本校を始めとする僅か四十八校が商業学校としての存続を許可されました。当時の時代背景からしても極めて大変であったことが伺えますが、参考までに、本校が商業の学校として存続できた理由の一つに始めて女生徒の入学を許可したことがあげられます。次に終戦後、転換した商業学校は次々に復元したのも東の間に、統合化の波がきたのです。占領下における占領軍の命令とあつて誠に冷酷なもので、名門と歌われた全国の商業学校が瞬く間に姿を消してしまいました。それまでに全国で六百六十一校あつた公立商業学校が一気に十八校へとなってしまうました。事実、中国地方で名実共に商業高校は唯本校だけとなったのです。裏話にもなりますが、占領軍が本校に来校された時に校歌の歌詞に武士道とある文言の修正を求められたとのことでした。それを当時の校長先生は知恵を絞って理解を求め無事に歌詞を変更することなく認められたのです。どのように解説されたかは本校の図書館(万古館)に資料がありますから生徒の皆さん是非とも調べてください。改めて校歌の意味の素晴らしさが分ると思います。

平成の時代となって、県下の商業高校は少子化による統合などの影響から萩・柳井・徳山・そして今年から防府が商工高校となり、現存する単独商業高校は、岩国・宇部・そして本校の三校のみとなりました。ある意味、歴史は繰り返すと言われますが、以前の商工時代に戻った学校もあります。いずれにしても、過去の教度に亘る本校存続の危機の中(恐らく昭和の戦時下と戦後間もない転換期が一番大変な時期だったと推察される)でも、当時の校長先生を始めとして教職員・生徒・同窓生・地域の方々の力で本校は開校以来一貫して公立の単独商業高校として現存していることは非常に意味があります。また、本校が開校した明治十七年は、わが国にとって「商業学校通則」が制定された年で、商業教育の原点の年でもあります。その意味でも本校はわが国の商業教育とともに歩んでいるといっても過言ではありません。わが国全体を見渡しても、開校時から一貫して公立(市立)の単独商業高校としてそのような永い歴史と伝統を誇っているのは東の横浜商業高校と西の下関商業高校だけなのです。

平成二十六年には創立百三十周年を迎えますが、今年の新入生から新しい制服となり、来年度の入学から新しい教育課程が導入されるようとしています。記念すべき年には全校生徒がすべて新しい制服を迎え、充実した施設・設備(新講堂竣工)を備えて、永い歴史の中で新しい学校として歩み始めようとしています。

歴代の校長先生

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|--|---|---|---|---|---|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  | | |
| 初代 中村 英吉
(明治17.10~19.4) | 第2代 菅川 清
(明治19.4~21.10) | 第3代 伊東雄次郎
(明治21.10~25.12) | 第4代 内田 一心
(明治25.12~26.9) | 第5代 草野 安吉
(明治28.9~28.10) | 第6代 堤 虎造
(明治27.2~27.6) | 第7代 三戸 得一
(明治27.8~34.8) | 第8代 齋藤軍八郎
(明治34.9~大正10.4) | 第9代 山崎 繁樹
(大正10.4~14.4) | | |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 第10代 藤井 鶴松
(大正14.9~昭和19.12) | 第11代 黒崎 晋介
(昭和19.12~21.4) | 第12代 上田 強
(昭和21.4~31.9) | 第13代 河村 達也
(昭和32.1~40.3) | 第14代 柴崎 靖彦
(昭和40.4~44.3) | 第15代 伊勢木 秀雄
(昭和44.4~46.9) | 第16代 金森 昌彦
(昭和46.9~50.3) | 第17代 木下 宗一
(昭和50.4~54.9) | 第18代 尾崎 秋信
(昭和54.4~57.3) | 第19代 亀田 義信
(昭和57.4~60.3) | 第20代 小松 英三
(昭和60.4~62.3) |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 第21代 小田 明
(昭和62.4~平成元.3) | 第22代 古堤 一三
(平成元.4~5.3) | 第23代 岩本 敏美
(平成5.4~7.3) | 第24代 小林 堅而
(平成7.4~10.3) | 第25代 林 佳二
(平成10.4~12.3) | 第26代 城島 越臣
(平成12.4~14.3) | 第27代 永富 康文
(平成14.4~15.3) | 第28代 三吉 英太
(平成15.4~18.3) | 第29代 伊藤 薫
(平成18.4~21.3) | 第30代 木村 静男
(平成21.4~23.3) | 第31代 山本 貴司
(平成23.4~) |